

成人慢性期看護過程演習の長期的学習効果

—臨地実習後の学生の認識からの評価—

The Long-term Learning Effects in a Nursing Process Practicum for Chronic Adult Patients

—Evaluation from Students' Perceptions after Clinical Training—

小野 千沙子, 佐藤 栄子*

*足利工業大学

要 旨

A 大学看護学部3年次79名を対象に、2年次で実施した慢性期患者事例を用いた看護過程演習の臨地実習に対する効果を検討するため、実習終了時に自記式質問紙調査を行った。74名の学生から回答を得た（回答率93.7%）。看護過程演習が実習で有用だったと認識していた学生は83.8%だった。看護過程演習の実習への有用性に関して、学生が記述した内容の意味を反映するように要約、抽象化してコードを作成し、意味内容の類似性、相違性からカテゴリーを作成した。学生の記載は【看護過程の展開方法】が最も多く、他に【慢性疾患やがんの患者の特徴や看護援助の考え方】や【グループ学習の効果や重要性】などのカテゴリーが抽出できた。さらに実習終了時点での看護過程演習の評価として、8割強の学生が看護過程演習は今後の実習や卒業後に役に立つ、8割弱の学生が演習は満足と回答していた。したがって、看護過程演習の学習効果は、臨地実習においても認められることが示唆された。今後の看護過程演習に対する改善意見内容では、【患者事例情報に既往歴や合併症を追加して個別性をだすこと】、【演習方法の工夫】などのカテゴリーを抽出できた。今後は今回の学生の主観的評価だけでなく客観的評価も加え、慢性期看護領域における、より効果的な看護過程演習の教授方法について、検討していく必要がある。

キーワード：成人看護学 慢性期 看護過程演習 臨地実習 教育評価

はじめに

看護過程はアセスメント、診断、計画、実施、評価という相互に関連しあう5つの段階から構成され、それら各プロセスを理解した上で、クリティカルシンキングのツールとして用いることは、患者に最善の看護を提供することにつながる。また看護過程には看護師が行う重要な活動がすべて含まれ、それは意志決定の基礎となる¹⁾。したがって看護教育において、講義や臨地実習を通して、学生が看護過程の特徴を理解し、根拠に基づいて系統的に考える能力を身につけるための教育がなされている。

近年、看護教育においても教育評価の必要性が指摘されるようになり、教員は評価の過程で学習成果を測定し、さらなる教育ニーズを明らかにするとともに、学生の学習目標達成と実践に必要な基本的能力の習

得に向け、教育計画を更新することが求められている²⁾。このような背景から、慢性期看護領域の教育評価、なかでも看護過程演習に関しては、多くの教育評価研究があり、演習は学生に様々な学習効果があると報告されている³⁻⁸⁾。しかし、それらの多くは演習直後の学習効果を評価しており、看護過程演習の効果を臨地実習での有用性という観点から検討した先行研究は少ない⁹⁾。石川ら⁹⁾は成人看護学領域の看護過程演習が、実習での看護過程展開にどの程度、有用であるかを検討しているが、具体的に看護過程演習で学習したどのような内容が、実習で役に立っているのか、その詳細は明らかにされていない。看護教育の効果は短期的な評価だけでなく、長期的にも評価し、教育計画を更新していくことが必須である。

我々はこれまでに先行研究として、複数の慢性期患者事例を用いた看護過程演習の評価を行い、学生自身

が学生同士の協力や問題解決能力の向上、看護過程の展開方法や看護方法の理解に効果があると認識していることを明らかにした¹⁰⁾。そこで本研究では、長期的な評価のひとつとして、慢性期患者事例を用いた看護過程演習の有用性を、実習終了後の学生の認識の面から明らかにし、今後の課題を検討することを目的とした。

方法

1. 研究対象

A 大学医療保健学部看護学科3年次79名を対象とした。これらの学生は2年次後期に成人看護学方法 I (慢性疾患・がん看護) で複数の慢性期患者事例を用いた看護過程演習 (詳細は後述) を行っている。

2. 慢性期看護に関する教育の実際

A 大学では看護学科2年次前期に成人看護学概論を履修するが、成人看護学概論では成人を対象にした看護の基盤となる考え方や理論、看護援助方法を学習する。2年次後期の成人看護学方法 I (慢性疾患・がん看護) では慢性期看護の概念や慢性疾患を持つ患者の看護方法について学習する。その後、3年次の成人看護学実習 I (以下、実習とする) で実際に慢性疾患を持つ患者を受け持ち看護過程の展開を行っている。慢性期看護に関する教育の流れを図1に示した。

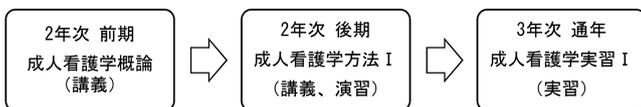


図1 慢性期看護に関する教育の流れ

成人看護学方法 I では、講義だけでなく、技術演習、看護過程演習を取り入れて教授している。看護過程演習では慢性疾患を持つ事例患者7事例を教員2名が作成し、事例集として全学生に配布する。学生は1グループ5~6名の計15グループとし、1事例を2~3グループが担当できるよう、事前に教員がグループ編成を行う。教員1名が7~8グループを担当し、進捗状況に応じて指導を行っている。看護過程演習の進め方は、病態関連図の作成、事例患者情報を追加した関連図の作成、関連図上で抽出した看護診断で優先順位が上位の診断について、看護計画を作成していく方法を取っている。最後にグループごとに演習成果の発表会を行い、学生同士の質疑応答や教員が口頭で指導を行い、終了となる。

3年次の実習では、4月~10月にかけて3週間の病院

実習を行い、実際に慢性疾患を持つ患者を受け持ち、看護過程の展開を行っている。3週間の実習では、1週目に受け持ち患者の情報収集、関連図作成、ゴードンの機能的分類に基づいたアセスメントの実施、看護問題の抽出、看護計画立案と学習を進めていく。2週目は看護計画に基づいた看護援助を実施し、実施した結果を評価し看護計画の修正を行う。3週目は修正した看護計画を実施し、評価を行うと共に、退院に向けた社会資源の活用や患者教育について学びを深めていく。

3. 調査方法

3年次の実習は4月~10月の間に行われ、学生によって実習時期が異なるため、それぞれの実習グループの最終日に、質問紙調査を行った。対象者に対して教員から研究目的と方法、倫理的配慮について説明を行って、協力を依頼し、調査票を配布した。調査票は無記名であること、研究成果を公表する際には個人が特定されることがないこと、研究への協力は自由であり、研究協力の有無は成績に影響しないことについて説明し、回収をもって同意とみなした。調査票は回収箱を準備し、その場で回収した。調査期間は平成25年4月~10月である。

4. 調査内容

本研究に用いた調査票では、最初に「2年次後期の成人看護学方法 I の最後に実施した、慢性期患者事例を用いた看護過程演習についてお尋ねします」と明記し、実習が終わった時点で、看護過程演習で学んだことが役立ったかどうか、看護過程演習の有用性について「役立った」「役立たなかった」の2件法で尋ねた。「役立った」と回答した者には、どのようなことが役立ったのか、看護過程演習の有用性に関する認識内容を記載するように求めた。さらに看護過程演習の今後の実習や卒業後への有用性に対しては、「非常に役に立つと思う」「まあまあ役に立つと思う」「どちらとも言えない」「あまり役に立たないと思う」「まったく役に立たないと思う」の5件法で、さらに実習終了時点での看護過程演習の満足度についても、「非常に満足している」「まあまあ満足している」「どちらとも言えない」「あまり満足していない」「まったく満足していない」の5件法で尋ねた。さらに「2年次で学習した慢性期患者事例を用いた看護過程演習が、もっと成人看護学実習 I で役に立つようにするには、どのようにすればよいと思いますか」という設問や自由記載欄を設け、改善意見を求めた。

5. 分析方法

看護過程演習の有用性、看護過程演習の今後の実習や卒業後への有用性、看護過程演習の満足度については各回答の割合を算出した。看護過程演習の有用性に関する認識内容や改善内容の自由記述部分については、記述内容を意味単位として区切り、学生が記述した内容の意味を反映するように要約、抽象化してコードを作成し、意味内容の類似性、相違性からカテゴリーを抽出した。分析は看護過程演習と実習を担当した2名の教員で行い、合意を得た。

6. 倫理的配慮

本研究は、桐生大学、桐生大学短期大学部倫理委員会により承認を得て実施した（受付番号2409）。

結果

調査票を配布した79名のうち、74名から回収が得ら

れ、回収率は93.7%だった。

図2に看護過程演習の有用性に対する回答結果を示した。「役立った」は62名（83.8%）、「役立たなかった」は10名（13.5%）、無回答が2名（2.7%）だった。

表1に看護過程演習の有用性に関する認識内容を示した。作成したカテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉、実際のデータを 〇 で示す。

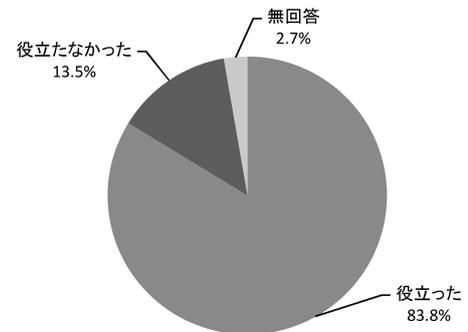


図2 看護過程演習の有用性 (n=72)

表1 看護過程演習の有用性に関する認識内容

n=62

カテゴリー名(記載数*)	サブカテゴリー名(記載数*)	回答例
疾患に関する知識(4)	—	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの疾患についてよく考えることができた 病態を理解した上で患者と接したため何を観察しなければいけないのかが明確であった
看護過程の展開方法(38)	看護過程のプロセス(6)	<ul style="list-style-type: none"> 看護過程の一連の流れが理解できた どのように展開できるかの視点から問題があげられるか、そこからどんな援助が考えられるか 看護過程の展開の仕方が分かった
	アセスメント(21)	<ul style="list-style-type: none"> 関連図から入ることで問題が挙げやすくなった 事例を用いて関連図を作成することで、どのようにつながれば良いか学べた アセスメントの進め方が分かった 基本的な病態関連図を作成することで、今後、必要となってくる治療や症状への理解を深めることにつながり、個性を取り入れた関連図を整理しながら作成することができた 成人1の病態関連図がアセスメントを行ううえでとても大切でありその大切さに気付いたのは2年次の事例があったからだと思う 関連図を書いて計画、診断をたてることで、想像しやすかった
	看護診断(2)	<ul style="list-style-type: none"> 看護問題の抽出ができるようになったと思う 診断名の適切な選択ができた
慢性疾患やがんの患者の特徴や看護援助の考え方(13)	看護計画立案(9)	<ul style="list-style-type: none"> 看護計画のT-Pを具体的に立てることに役立った 看護計画の立て方などが復習できました 具体的にどのような援助が必要になってくるか 援助計画が参考になった
	—	<ul style="list-style-type: none"> 慢性疾患ではどのような経過をたどるのか、どんな問題が考えられるか理解することができた 一人の患者の予後まで考えて看護過程を行っていくことが身についた 在宅に向けての家族への支援や社会資源について学ぶことができた 慢性疾患を持つ患者に対する継続看護について 計画立案時、授業でもらった教員からのアドバイスが参考になる部分があった 終末期の患者さんの心理を理解することができた
	グループ学習の効果や重要性(5)	<ul style="list-style-type: none"> グループで1つの事例を展開していくことで自分だけでやるよりも多角的に事例を捉えられ、少し視野を広げた上で実習に臨めたと思う グループの人達と話し合うことで色々な視点から援助の方法を考えることができた
実習の記録用紙の書き方がわかること(11)	—	<ul style="list-style-type: none"> どのように書いていいかを明確にすることができた スムーズに実習の記録を進めていくことができた 実習時に記録を書くときに参考になった 記録の書き方が分かった 記録のまとめ方

* 複数回答

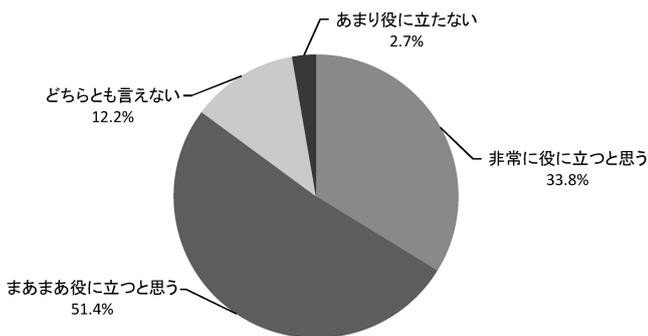


図3 看護過程演習の今後の実習や卒業後への有用性 (n=74)

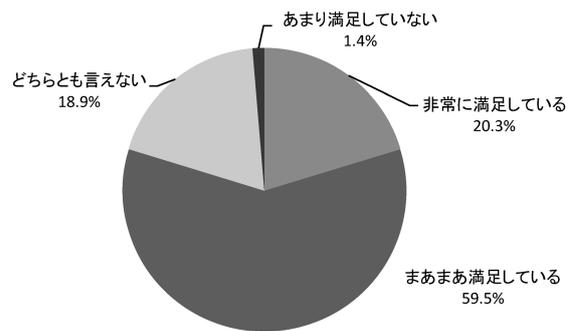


図4 看護過程演習の満足度 (n=74)

カテゴリーとして【疾患に関する知識】、【看護過程の展開方法】、【慢性疾患やがんの患者の特徴や看護援助の考え方】、【グループ学習の効果や重要性】、【実習の記録用紙の書き方がわかること】が挙げられた。

【疾患に関する知識】ではそれぞれの疾患についてよく考えることや病態を理解した上で患者と接したため何を観察しなければいけないのかが明確であったように、事例患者の病態生理を学習することが、実際の患者への観察に生かされている内容が表されていた。【看護過程の展開方法】は記載数が38と最も多く、サブカテゴリーとして〈看護過程のプロセス〉、〈アセスメント〉、〈看護診断〉、〈看護計画立案〉を作成した。具体的には、看護過程の一連の流れが理解できたという看護過程の展開方法の理解や関連図から入ることで問題が挙げやすくなった、事例を用いて関連図を作成することで、どのようにつながれば良いか学べたなど関連図作成の役立ちの記述が見られた。またアセスメントの進め方が分かった、看護問題の抽出ができるようになったなどアセスメント方法や問題抽出の理解や看護計画のT-Pを具体的に立てることに役立ったという看護計画の立案方法に関する記述もあった。【慢性疾患やがんの患者の特徴や看護援助の考え方】は、【看護過程の展開方法】の次に記載が多く、慢性疾患ではどのような経過をたどるのか、どんな問題が考えられるか理解することができたや一人の患者の予後まで考えて看護過程を行っていくことが身についたなどが、【グループ学習の効果や重要性】ではグループでひとつの事例を展開していくことで自分だけでやるよりも多角的に事例を捉えられ、少し視野を広げた上で実習に臨めたと思うなどの意見があった。さらに【実習の記録用紙の書き方がわかること】は、実習時に記録を書く時に参考になった、どのように書いてよいのかを明確にすることができたなどの記載があった。

図3に看護過程演習の今後の実習や卒業後への有用性を示した。「非常に役立つ」は25名(33.8%)、「まあまあ役立つ」は38名(51.4%)、「どちらとも言えない」は9名(12.2%)、「あまり役に立たない」は2名(2.7%)で「まったく役に立たない」の回答者はいなかった。

図4に看護過程演習の満足度を示した。「非常に満足している」は20.3%、「まあまあ満足している」は59.5%、「どちらとも言えない」は18.9%、「あまり満足していない」は1.4%で「まったく満足していない」の回答者はいなかった。

看護過程演習が、もっと実習で役に立つようにするには、どのようにすればよいと思いますかという質問については、23名から回答が得られた。表2に看護過程演習に対する改善意見内容を整理して、示した。カテゴリーとして【患者事例情報を追加して個別性をだすこと】、【演習方法の工夫】、【看護過程演習の時間】、【教員の指導方法】が挙げられた。

考察

1. 看護過程演習の有用性について

看護過程演習で学んだことが実習で役立ったかという有用性を問う質問に対して、実習直後は83.8%の学生が役立ったと回答していた。先行研究¹⁰⁾では、「演習での学習内容が今後どのくらい役立つか」の質問に対して、演習直後は9割強の学生が役立つと回答しており、先行研究と比較すると、役立つと回答した割合が、演習直後と実習直後でやや減少しているものの、概ね学生は看護過程演習がその後の実習で役立つと認識していると考えられる。

実際に実習で、どのような事が役立ったのか、その内容は5つのカテゴリーに分類できた。中でも【看護過程の展開方法】の記載数が最も多かった。石川ら⁹⁾の研究でも、大多数の学生が学内の看護過程演習は、

表2 看護過程演習に対する改善意見の内容

n=23

カテゴリ名(記載数*)	回答例
事例患者情報を追加して個性をだすこと(9)	<ul style="list-style-type: none"> ・合併症や既往歴、個性がでるような内容を事例に入れたほうが良いと思います ・糖尿病や認知症など既往を持った患者にするといいと思います ・演習では患者の疾患がどのような経過をたどっているのかわかりやすかったです、実習では様々な疾患が絡み合ってくるため難しいと感じた。演習ももう少し難しくしていいと思います ・代表的な疾患でないほうが役に立つと思います
演習方法の工夫(12)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分達が苦手としている分野をグループ内で話し合い苦手なところを選べるようにできたらよりよい実習ができると考える ・グループ学習では6人は多いと思います。もう少し少人数の方が個人で考えて看護過程を展開できると思います ・標準的な問題をまず個人あげてグループメンバーとどうして自分はこのような看護診断をあげたのかを話すようにすると良いと思う。そうすることによって具体的に看護計画を立てられるのではないかと ・ひとつの看護過程ではなく、複数の看護過程に手をつけるといいと思う ・看護過程演習自体はとても必要だと思ったが、私の場合忘れてしまっていた。それぞれ復習するのは当たり前だけど、みんなで振り返る時間があると良いと思いました
看護過程演習の時間(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・看護過程演習を授業でもう少し時間をとってほしい
教員の指導方法(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・看護診断をどのように挙げていけばよいのかヒントを与えて欲しい

*複数回答

実習時の看護過程の展開に役立ったと回答しており、本研究でも同様の結果が得られた。これは、看護過程演習の学習目標として設定している、「慢性疾患やがんなどの様々な健康問題をもつ対象者の看護過程の展開方法と問題に応じた看護方法を理解できる」が達成されており、看護過程演習が学内の学びだけではなく、実習で活用されていると考えられる。

さらに【看護過程の展開方法】は、看護過程の各段階²⁾の観点から、5つのサブカテゴリに分類することができた。その中では、アセスメントに関する記載数が最も多かった。事例を用いて関連図を作成することで、どのようにつながれば良いのか学べた や 成人Iの病態関連図がアセスメントを行ううえでとても大切であり (中略) 事例があったからだと思う など、関連図を作成しながら疾患の病態生理や情報を整理することが、患者を多角的にとらえることにつながり、健康問題の解釈や分析の理解につながったことが推察できた。アセスメントとは、情報を収集しながら、同時にその情報が何を意味するのかを分析し解釈することであり、正確かつ十分なアセスメントが正確な診断を導きだすと言われている¹⁾。このようにアセスメントは看護過程の段階で重要な位置づけであるが、学生にとっては非常に難しいと感じるプロセスでもある。学生は実際の患者を受け持ってアセスメントの段階の学習を深める中で、有用性を感じる者が多かったことが明らかになった。

【慢性疾患やがんの患者の特徴や看護援助の考えかた】では、一人の患者の予後まで考えて看護過程を行っていくことが身についた、慢性疾患ではどのような経過をたどるのか、どんな問題が考えられるのか理解することができた など、慢性期看護の特性に関連した内容が示されていた。これは、我々の先行研究¹⁰⁾の演習直後でも明らかになったカテゴリである。演習内では、看護過程演習で複数事例を使用したこと、安定・維持期、急性憎悪期、終末期など事例患者をさまざまな病期で作成したこと、さらに演習成果の発表会を行い、他の事例に取り組んだグループの発表を聞いたことなどから得られた、学生の学びの内容だと思われるが、このような慢性期看護の考え方の学習効果が実習後にも維持されている可能性が示唆された。

さらに記載数は少なかったものの、我々の先行研究¹⁰⁾と同様に、【グループ学習の効果や重要性】に関する記述もあった。看護過程演習では、看護過程の展開や看護方法の理解を深めること以外に、グループ学習を通して、学生同士が協力しながら、問題解決能力を向上することも目標として設定していた。学生らが演習を通して学んだ、他者と話し合うこと、協力することは、学生自身の力となり、実習の場で活用されているのかもしれない。

我々の先行研究¹⁰⁾にはなかったカテゴリとしては、【実習の記録用紙の書き方】が挙げられた。記録の

書き方が分かった や スムーズに実習の記録を進めていくことができた などの記載があり、実習と同じ記録用紙を看護過程演習で使用することで、学生は事前に記録の書き方を理解しており、実習ではスムーズに記録物を記載することにつながっていると考える。

加えて、看護過程の今後の実習や卒業後への有用性、看護過程演習の満足度については、我々の先行研究¹⁰⁾と、ほぼ同様の結果であり、有用性、満足度の評価は高かった。以上のことから、看護過程演習は、演習直後だけでなく、その後の実習においても効果が認められることが示唆された。

2. 今後の看護過程演習での教授方法の課題

看護過程演習に対する改善意見は4つのカテゴリーに分類できた。その中でも【事例患者情報を追加して個別性をだすこと】の記載数が多く、合併症や既往歴、個別性ができるような内容を入れたほうが良い、糖尿病や認知症など既往を持った患者にすると思います などの意見があった。これは演習の事例は学生が学習しやすいように教員が作成したものであるが、実際に実習で受け持つ患者の多くが、様々な疾患を抱え、その病態が複雑に絡み合い障害が生じていることから、学生が演習と実習の難易度の差に戸惑いを感じていることの表れであろう。しかし、2年次後期で行う看護過程演習の目的は、慢性疾患の特徴を理解し看護過程を展開することであり、既往歴や抱える問題を複雑にすることで本来の目的が達成されるかどうか定かではない。演習事例の難易度に関しては、今後も詳細に検討を加えていく必要がある。このような学生の意見は、演習直後ではなかったものであり、実習を経験したことで、学生の看護過程の展開能力が高まっている可能性も示唆される。

同様に、【演習方法の工夫】についても記載数が多く、自分達が苦手としている分野をグループで話し合い苦手なところを選べるようにできたらよい や グループ学習では6人は多いと思います など、事例を学生が選びたいという意見や、グループ人数に対する意見があった。学生自身が事例を選択することで演習への積極的な取り組みや意欲の向上が期待できる反面、15グループの学生が平等に事例を選択することは、非常に難しい。またグループ人数についても今回の演習で設定した1グループ5～6名が妥当な人数かどうかについては、学生の主観的な意見だけでは判断が難しい。1グループあたりの人数を少なくするとグループ数が増え、1グループあたりの指導時間の減少が予

測される。グループワークが有効に行われるための1グループあたりの人数は7～8人程度¹¹⁾という報告もあり、グループ人数については、配置教員人数や指導体制を踏まえながら検討していく必要がある。

その他には、演習時間の確保、教員の指導方法への記載があった。演習時間の確保については全授業時間数の中で看護過程演習に使用できる時間には限りがあることから、限られた時間数の中でどのように教授していくべきか、指導案の充実と共に、長期的な視点で検討する必要がある。

3. 本研究の限界と今後の課題

今回の調査では、研究手法としてレトロスペクティブなデザインを採用している。そのため学生の記憶を元にしたデータを分析していることに起因した研究の限界がある。

まず当該領域の実習直後に調査を実施したため、学生の回答時期には最大半年の開きがあった。学生の中には、演習後、8ヶ月経過してからの調査となった学生も含まれている。このような場合、学生の看護過程演習の記憶が薄れる可能性が高い。

また看護過程演習と実習は、同じ2名の教員が担当している。従って、得られた結果が、単に看護過程演習の教育効果だけとはいえない可能性がある。

加えて、今回は学生の認知面から、分析、検討を行うという一側面からの検討のため、今後は実習の記録物や看護実践内容などの客観的側面からの評価も併せて行っていく必要がある。その上で、慢性期看護領域における、看護過程演習を用いた、より効果的な教授方法を追求していきたい。

引用文献

- 1) Rosalinda Alfaro-LeFevre : 基本から学ぶ看護過程と看護診断. 医学書院 (東京), 第6版. 3-4, 2010.
- 2) Marilyn H.Oermann, Kathlee B.Gaberson.: 看護学教育における講義・演習・実習の評価. 医学書院 (東京), 1-23, 2001.
- 3) 岩月すみ江, 武分祥子ら : 看護過程演習における評価と課題—成人看護学実習前演習の振り返り用紙の分析—. 飯田女子短期大学紀要, 25 : 179-190, 2008.
- 4) 柴田和恵, 前田明子ら : 成人看護学看護過程演習の評価. 天使大学紀要, 11 : 29-37, 2011.
- 5) 小田和美, 小野幸子ら : 紙上患者の事例を活用

- した看護過程演習における教育上の課題（第1報）—関連図への教員コメント内容の分析を通して—。岐阜県立看護大学紀要，4 (1) : 105-111, 2004.
- 6) 豊島由樹子，澤田和美ら：紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価（第1報）—看護過程演習前後における学生の自己評価—。聖隷クリストファー大学看護学部紀要，(11) : 127-138, 2003.
- 7) 澤田和美，豊島由樹子ら：紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価（第2報）—実技演習との関連からみた看護計画記録の分析—。聖隷クリストファー大学看護学部紀要，(11) : 139-144, 2003.
- 8) 豊島和美，伊藤ふみ子ら：紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価（第3報）—関連図を取り入れた演習における学生の自己評価の変化—。聖隷クリストファー大学看護学部紀要，(13) : 81-91, 2005.
- 9) 石川りみ子，上間直子ら：成人保健看護における看護過程演習の臨床実習への学習効果。沖縄県立看護大学紀要，(3) : 85-93, 2002.
- 10) 佐藤栄子，小野千沙子：慢性期患者事例を用いた看護過程演習の効果と課題—複数の患者事例導入の試み—。桐生大学紀要，13 : 117-125, 2013.
- 11) 藤野ユリ子：看護学生がグループワークで感じる困難と満足との関係。日本看護学教育学会，15 (1) : 1-14, 2005.

The Long-term Learning Effects in a Nursing Process Practicum for Chronic Adult Patients —Evaluation from Students' Perceptions after Clinical Training—

Chisako Ono, Eiko Sato*

*Ashikaga Institute of Technology

Abstract

A self-administered questionnaire survey was conducted after subjects, comprising 79 third-year students of the Department of Nursing of University A, and completed second-year clinical training involving nursing process practicum using chronic cases in order to investigate the effects of the clinical training. Responses were received from 74 students (response rate: 93.7%). A total of 83.8% of students perceived that the nursing process practicum was useful as practical training. Answers provided by students were summarized to reflect semantic content regarding the usefulness of nursing process practicum for practical training and then abstracted. Categories were created based on similarities and differences in semantic content. The most common category in students' responses was nursing process development methods. Other categories included characteristics of chronic disease and cancer patients and concept of nursing support. and the effects and necessity of group learning. When evaluating nursing process practicum upon training completion, over 80% of students answered that nursing process practicum would be useful for future practical training and after graduation, and just under 80% responded that they were satisfied with the practicum. Therefore, the results suggested that the learning effects of nursing process practicum are also apparent in actual clinical practice. Categories such as adding individuality to patient case data with medical history and complications and making adjustments to practicum methods indicated areas for improvement in nursing process practicum. In the future, in addition to subjective evaluations by students, objective evaluation needs to be conducted to investigate more effective teaching methods for nursing process practicum in the field of chronic nursing.

Keywords: Adult nursing, chronic, nursing process practicum, clinical training, educational evaluation